

厚真高校第3学年34名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

そして、保護者の皆様、学校長を始め諸先生の皆様、重ねてお祝いを申し上げます。厳しい寒さも漸く和らいできました。春が近いなと感じられ、新しい門出を祝うにふさわしい日となりました。

皆さんは、この3年間に厚真高校の生徒として、学生の本分である勉強に、クラブ活動に、或いは生徒会活動に情熱を注ぎ、青春の血をたぎらし、たしかな友情を深めあったと思いますが、その他にボランティアやイベントへの協力、学校行事などを通して、本町に明るい話題を沢山提供していただきました。改めて心からお礼を言いたいと思います。

3年間は早いものです。入学式のことを思い出しています。どことなく幼さが残る皆さんに、東日本大震災の復興への願いと次世代に託す希望、そして支えあうことの大切さを語ったことを覚えています。被災地の復興は、まだまだ時間がかかりそうですが、日本人が一丸となって頑張っていかなければなりません。

さて、皆さんはこの厚真高校で、得難き時を過ごし、得難き沢山の友と出会ったと思いますが、いよいよ明日からは、甘えの許されない厳しい現実が待っています。これまで多くの方々から多くのものを与えられてきた皆さんですが、これからは自分の力で、勇気と智慧と努力で未来を切り拓いていかなければなりません。その為にも夢や目標をしっかりと持つことが大事ですが、それでも紆余曲折があり、希望と違う道を歩むことになる場合もあるかと思います。そういう場合でも決した投げやりにならずに、まずは、自分が置かれた境遇を素直に受け入れ、その場所で最善を尽くすことが大切です。どんなときも自分らしさを見失わなければ、強い信念を持っていれば、自分の進むべき道は必ず見つかります。意志あるところに道ありです。

ここで、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの招致に貢献した佐藤真海選手の言葉を紹介したいと思います。マスコミ的には、滝川クリステルの「おもてなし」が脚光を浴びましたが、私は不屈の精神でハンディを乗り越えた佐藤真海選手のプレゼンにおける「私は目標を決め、それを越えることに喜びを感じ、新しい自信が生まれた。私にとって大切なのは、私が持っているものであって、私が失ったものではない」という言葉に素直に感動しました。ご存知のように、佐藤選手は、皆さんの年頃に右膝から下を骨肉腫で失っていますし、故郷は東日本大震災で被災した気仙沼です。

固い意志と困難に挑戦する行動力こそが大切であり、多くの出会いと一つひとつの努力の積み重ねがいつか必ず大きな実を結ぶことになるかと信じています。

結びに皆さんの未来に幸多かれと折念し、保護者の皆様、諸先生方のご労苦に感謝申し上げます。厚真高校のご発展を祈念して、祝辞と致します。本日は誠におめでとうございます。

平成26年3月1日

厚真町長 宮坂尚市朗